

戦後文学の志（一）

——書かれ得なかつたものへの眼差しをめぐつて——

栗原敦

1

八年にわたるシベリア抑留体験ののち一九五三（昭和二八）年に故国に帰り、翌一九五四年から「文章倶楽部」に詩の投稿を開始して注目され、戦後、年刊詩集を刊行していた「荒地」の一九五八年版にも迎えられた石原吉郎に「事実」という作品がある。

これは、はじめ「文章倶楽部」の一九五六年二月号に発表され、第一詩集『サンチヨ・パンサの帰郷』（思潮社、一九六三年一二月）が刊行された時、巻頭に配された「位置」、「条件」、「納得」につづいて第四番目に置かれたものだった。

事実

そこにあるものは

そこにそうして

あるものだ

見ろ

手がある

足がある

うすらわらいさえしている

見たものは

見たといえ

けたたましく

コップを踏みつぶし

ドアをおしあけては

足ばやに消えて行く 無数の

屈辱の背なかのうえへ

びったりおかれた

厚い手のひら

どこへ逃げて行くのだ

やつらが ひとりのこらず

消えてなくなっても

そこにある

そこにそうしてある

罰を忘れられた罪人のように

見ろ

足がある

手がある

そうして

うすらわらいまでしている

一読、巻頭作「位置」において描き出した、いかなる状況の苛酷にも押しつぶされることなく、揺るぎなくその位置に佇立し続ける人物の像を踏まえつつ、あたかもその陰画、戯画のごとくに、「うすらわらいさえ」しながら、「罰を忘れられた罪人のように」「そこにあるもの」を提示し

ていたことが見て取れる。

「逃げて行く」「足ばやに消えて行く 無数の」「屈辱」の「やつら」。その背中に「厚い手のひら」が「びったりとおかれ」てしまっているのは、逃げようとしても逃げ得ない罪の刻印に他ならないのだが、そうある以外ないあきらめを自覚しているゆえなのか、馬鹿のように罪の自覚すら抱き得ないゆえなのか、もしかすると気弱に、卑屈に、ほんやりと「うすらわらいまでして」佇んでいるのかも知れぬ、もはや人間と呼ぶことができないような人のかたちをしたもの。表題の「事実」として「見たもの」はこれだった。認めたくない、見なくてもいいものなら、見たくない。そこから「逃げ」られるのなら逃げたい、そういう場所にあるもののことだった。

巻頭作「位置」が、ひとつの理想化された像として、状況に流される人間的な転落を決して肯んじることのなかった人物を示していたのに比べて、こちらはなんとという痛ましきさだろう。巻頭作の「位置」（初出は「鬼」30、一九六一年八月）を次にかけておこう。

位置

しずかな肩には

声だけがならぶのではない

声よりも近く

敵がならぶのだ

勇敢な男たちが目指す位置は

その右でも おそらく

そのひだりでもない

無防備の空がついに撓み^{たお}

正午の弓となる位置で

君は呼吸し

かつ挨拶せよ

君の位置からの それが

最もすぐれた姿勢である

作品について語句を追ってパラフレーズすることは避け、今は、帰国後十五年を経て漸く散文の形で語りはじめた一連の、石原の抑留体験を掘り下げたエッセイのひとつ「ペシミストの勇氣について」（初出「思想の科学」一九七〇年四月号）に見られる、友人鹿野武一の振る舞いを記した部分を紹介するに留めよう。

作業現場への行き帰り、囚人は必ず五列に隊伍を組まされる。行進中、一歩でも列を乱して離れれば即座に射殺されることを宣告されている。つまずいても、滑っても射殺されうる。凍てついた雪の中、誰もが争って列の内側に入

ろうとするが、「実際に見た者の話によると、鹿野は、どんなに寒いにも進んで外側の列にならんだということである。」

石原は、鹿野をこのように語って、「いまにして思えば、鹿野武一という男の存在は私にとってかけがえのないものであった。彼の追憶によって、私のシベリヤの記憶はかろうじて救われているのである。このような人間が戦後の荒涼たるシベリヤの風景と、日本人の心のなかを通って行つたということだけで、それらの一切の悲惨が救われていると感ずるのは、おそらく私一人なのかもしれない。」と、この文を結んでいる。鹿野の事実がいかなるものであったかを越えて、石原に、これを一つの理念、支えとすべき、いわば理想の像としないではいられない心意があったことは間違いない。

それにしても、ふたたび作品「事実」に戻って、現在では、多田茂治『石原吉郎「昭和」の旅』（作品社、二〇〇〇年二月）が記す抑留者仲間の回想のことを思い出さないわけにはいかない。

最も苛酷だったシベリア抑留体験を振り返り、それを深めた、石原のすぐれたエッセイを引用しつつ、多田はソビエト社会の密告制度について触れ、ラーゲリで「石原吉郎も苦心して作った針を、密告によって危うく摘発されかけ

た」こともあったと紹介し、さらにソルジェニツインの『収容所群島』での記述を引用した上で、「ラーゲリもその例外ではなかった。特に弱者がわが身を守るために密告者ストウカチになった。」と書いて、次のように続けている。

帰国から数年後のことだが、石原はある日林秀夫宅を訪ねて来て酒を飲み、酔いつぶれて横になり、うつらうつらしていたとき、ふと洩らしたという。

「おれも、一番苦しいときは、人を売ったからな」

林秀夫が耳にした、石原吉郎の最もいたましい言葉だったという。

このとき石原は、バムのラーゲリで起こったさまざまなこと話を語ったそうだが、林が語る。

「彼の話のなかには、到底筆に出来ないようなこともありましたよ。ええ、彼も書いてはいませんが……」

なんとも痛ましい限りであるが、石原の評論集『日常への強制』（構造社、一九七〇年一二月）、『望郷と海』（筑摩書房、一九七二年一二月）、『海を流れる河』（花神社、一九七四年一月）、『断念の海から』（日本基督教団出版局、一九七六年二月）、『二期一会の海』（日本基督教団出版局、一九七八年八月）に見られる、抑留体験を掘り下げた思索、

類い希なエッセイ群によっても、ついに「筆に出来ない」で終わった多くのものがあつたというのである。一般的にも、あまりのことで散文として直叙し得なかったことは、恐らく多々あつたに違いない。そしてさらに、自身に即しては、「人を売った」が具体的にどのような、どんなレベルでのことであつたかさえ推測しがたいが、たしかに石原のエッセイに直接に取り上げられたことはなかった。それほどまでに、苛酷で、痛ましいとしか言いようのない事柄であつたと考える他はない。

だが、三たび石原の詩篇「事実」に返りたい。

思えば、自らの屈辱、罰せられずにおめおめと生き延びた罪、犯してしまったその時に、なぜ神は間髪を入れずに雷を下して殺さなかったのか、と足ずりするような恥の自覚、実に、石原はこれをこの作品「事実」に書き記していたのではなかったろうか。石原が生涯に亘って忘れるわけに行かなかつた、ついに逃れることの出来なかつた恥と屈辱の意識がここに秘められていたのだと、今にして私は考えるものである。^{注1}

2

「見たものは／見たといえ」の石原の詩句は、石原に固

有の言い難い体験、忘れたいと願っても忘れ得ぬ、どこまでも追いかけて来てしまう罪の意識と分かちがたいものであった。

戦中の諸々の体験は、それぞれの体験者の資質とそれぞれの状況の重なりにおいて姿を変えながら同質の課題を背負わせた。たとえば、自ら認めたくない戦争にビタ一文加担したくないと確信した宗左近が、徴兵された兵営で狂者を装い通して見事に兵営の外へと帰還を果たしながら、その後の空襲のさなかに共に逃げまどった母の手を離し自分だけが生き延びることになった体験に対して、母を見捨て、見殺しにしたのは自分だと思ひ続けなければならなかった（長篇詩集『燃える母』弥生書房、一九六七年十月）のも、そのひとつに違いない。

ほとんど最後の学徒動員として徴兵され、兵営、戦地、敗戦後の島嶼での抑留体験を経て、何としてでもこれを戦後社会のもとに着地させねば生きつづげられない思いを抱いた亀島貞夫の「白日の記録」連作の試みも、そのひとつであったと思われる。

戦後、一九四八（昭和二十三）年六月末に「近代文学」の同人拡大に際してその同人になった亀島^{注2}だが、「近代文学」創刊同人たちと自分（たち）との間にあった決定的な世代差について、「戦後文学の党派性」管見」（『近代文

学』創刊のころ』深夜叢書社、一九七七年八月）でこう書いている。

「七人のうち誰一人として戦争体験がない」その「偶然」を鶴見は、そのものとしては詳述している訳ではないが、私に頷くところが、殆ど不可抗的に、生じてくる。最も乱暴に図式化すれば、それは、一定年齢時における生身の人間の、マルクス主義体験と、戦争体験との対比に発するといえる。

とあって、さらに、自身の小説「白日の記録」（その第一回発表作、「赤門文学」No.1、一九四八年六月）を埴谷雄高に見てもらったときの彼の感想をこう紹介している。

約一年後、私が「百日^{マヤ}の記録」を埴谷氏に見てもらった時、最初に言われた言葉が記憶にある。——「あなたたちには、私が見たという、それが何より強く、絶対に譲れぬものとしてあるんだな」という、幾らか当惑した、幾らか同情する、明らかに異質のものに対する、眼・表情がそこにあった。

石原吉郎の場合とは、またもうひとつ異なった「私が見

た」「絶対に譲れぬもの」が亀島の場合、何であったか、そしてそれは書き尽くすことができたのか否か、の問題は、『白日の記録』（第一作と区別して、連作の全体を『』で表示する）に即して、検討されなければならない。

現在確認できている限りにおいて、『白日の記録』の発表の経緯をまとめれば以下のようなになる。

タイトル	末尾付記	発表機関	年月
1 「白日の記録」	(第一章)	「赤門文学」	1948・6
2 「白日の彩色」(『白日の記録』の一節、一九四八・一〇・一八)		「近代文学」	1949・2
3 「芳蘭伝説」(未完。「白日の記録」の一部)	注 ³	「潮流」	1949・4
4 「芳蘭伝説」(一九四九・三・一一)		「潮流」	1949・5
5 「驢馬の列―白日の記録―」(未完)		「近代文学」	1949・11
6 「傷痕―白日の記録―」(未完)		「近代文学」	1949・12
7 「時は停り―白日の記録―」(未完)		「近代文学」	1950・1
8 「島」		「近代文学」	1953・12
9 「島」	(第一章未完)	「近代文学」	1954・1

注1 石原のエッセイ「オギーダ」(『日常への強制』所収)

にナチスの強制収容所からの帰還者のひとり、精神医学

者ヴィクトル・E フランクルの『夜と霧』から「しかしどのようなにして、私たちがそれに慣れたかは聞かないで欲しい。」がエピソードのように引用されたこと、また「強制された日常から」(同)の中でも、「すなわちもつともよき人びとは帰って来なかった」を引用して「いわば人間でなくなることへのためらいから、さいごまで自由になることのできなかつた人たちから淘汰がはじまったのである。」と記していたことも思いあわせられるのである。

なお、石原吉郎に関しては、拙稿「はじめに」花であること」が……石原吉郎論・素描」(『詩が生まれるところ』蒼丘書林、二〇〇〇年九月)、「石原吉郎」確認されない死のなかで」(田中実・須貝千里編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ)『評論編2』右文書院、二〇〇三年二月)を参照いただければ幸である。

2 「近代文学」昭和二三年八月号の編集後記に「六月末、新らたに左記の如く、同人の参加をえた。」とあって、「安部公房、梅崎春生、青山光二、亀島貞夫、斎藤正直、椎名麟三、関根弘、島尾敏雄、中田耕治、高橋義孝、高橋幸雄、武田泰淳、原民喜、原通久、福田恒存、船山馨。」があげられている。

なお、亀島貞夫(二〇〇七年七月二日没)の紹介として、『日本近代文学大事典』(講談社、一九七七年一

月)における記述を以下に引用しておく。ただし、「近代文学」同人となったのは、先に記した編集後記での記述と異なり七月となっている。

「亀島貞夫 かめしまさだお 大正一〇・三・一四(1921)小説家、編集者。大阪生れ。昭和一九年東大国文科卒。第二次赤門文学同人、また二三年七月より近代文学同人。『白日の記録』(『赤門文学』昭二三・六)『驢馬の列』(『近代文学』昭二四・一一)『時は停り』(『近代文学』昭二五・一)など、学徒動員による自己の戦争体験を深くまた多様に内面化させた特異な作品群を持つ。一方八雲書店で雑誌「芸術」「八雲」を編輯したが、とくに前者の編集は戦後派文学雑誌として、一定の水準に達している。八雲書店退社後は群馬県で高校教育にたずさわる。(大屋幸世)」。

3 3・4の「芳蘭伝説」については島田高志氏の教示による。

(続く)

付記

この場を借りて、前号に掲載した「小倉豊文の宮沢賢治研究」について、一カ所訂正をさせて頂きたく存じます。それは、小倉の没年月日のうち日を一日としましたが

(四〇、四二頁)、一〇日の誤りであり、お詫びして訂正致します。じつは「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報」(第14号(クラレ)、一九九七年三月)の追悼特集「小倉さんを偲んで」の記載に拠ったものだったので、これも合わせて一〇日に訂正する次第です。

(くりはら あつし・実践女子大学教授)